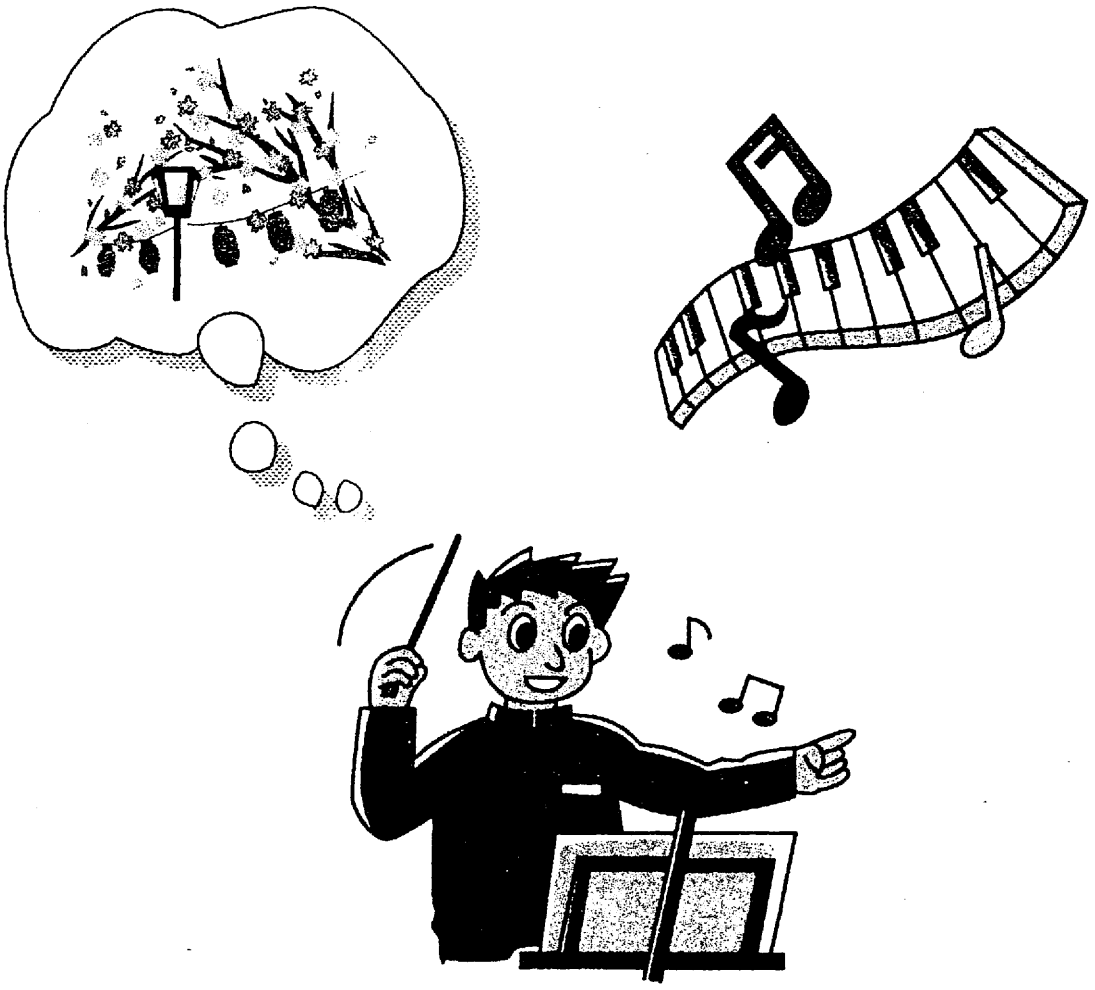
日本の伝統打楽器を楽しむ指導の工夫

―和太鼓によるﾘｽﾞﾑ表現活動を通して―



浦添市立教育研究所　第27期　研究員
浦添市立神森中学校　大　田　朝　健

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
Ⅱ　めざす生徒像　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
Ⅲ　めざす授業像　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
Ⅳ　研究の目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
Ⅴ　研究の仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
Ⅵ　研究構想図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
Ⅶ　研究内容　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　1　新学習指導要領（音楽科器楽）の確認　・・・・・・・・・・・・・　3
　2　和楽器を授業に取り入れる際の留意点　・・・・・・・・・・・・・　3
　3　和太鼓を使用する理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3
　4　和太鼓の指導法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
Ⅷ　指導計画の作成　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　1　題材名「和太鼓のリズム表現」　・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　2　題材目標　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　3　題材について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　4　単元指導計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　　第４時の展開　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　9
　　第５次の展開　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１
Ⅸ　研究の考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１４
　1　作業仮説の考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１４
Ⅹ　研究の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
　1　研究の成果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
　2　今後の課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
　　おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６
　　参考・引用文献　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１６

日本の伝統打楽器を楽しむ指導の工夫
― 和太鼓によるリズム表現活動を通して ―

浦添市立神森中学校　大田朝健

【要約】

本研究は学習指導要領の改訂で今年度から音楽科に導入された和楽器の教材化に取り組んだものである。数多い和楽器の中から和太鼓を選び、「日本の伝統打楽器を楽しむ指導の工夫」をテーマに取り組んだ。「伝統打楽器を楽しむ生徒」を育成するために、和太鼓の表現活動の場を設定し、和太鼓の知識や叩き方の動作を細かく分解し指導した。和太鼓の曲を完成させるために、グループ活動や地域の人材を活用し専門的な指導を受けた。その結果、生徒は和太鼓に対する基礎的な知識・技能が向上し、「伝統打楽器」を楽しく演奏した。

キーワード　□中学校音楽　□和楽器　□和太鼓　□伝統打楽器を楽しむ　□地域の人材活用

Ⅰ　テーマ設定の理由

国際化社会がますます進展し、異文化を理解し尊重する態度が必要となった。そのためにはまず自国の文化や伝統を尊重することが必要である。中学校音楽科の学習内容にも「和楽器については３カ年間を通じて、１種類以上の楽器を用いること」となった。しかし、和楽器は高価なものが多いうえ、保管管理がしにくいため、各学校において楽器を揃えることは難しいのが現状である。そのような中で、エイサー等に使われる「和太鼓」は生活や祭りなどの年中行事、学校の運動会や文化祭等で演奏され、なくてはならない身近な楽器である。

和太鼓は、打った瞬間の手応えや振動は心に響き渡るものがあり、「ドーン」と響く和太鼓の音は、人々の心を躍動感へとかりたて知らず知らずのうちに音の世界に誘う魅力がある。また、和太鼓の音は小さい音から大きな音まで幅広い音量を駆使でき、自分のイメージを自由に表現できる。その上、リズム感を養うにも和太鼓は威力を発揮し、演奏技能にかかわらず、すべての子が短時間で演奏ができる。

日本の伝統打楽器を楽しむ生徒を育成するために、和太鼓の知識やたたき方の動作を細かく分解した指導法や、地域の人材を活用し「成就感」を味わわせるような発表の場の工夫について研究をするために本テーマを設定した。

Ⅱ　めざす生徒像

和太鼓の基礎的な「知識・技能」を身に付け、日本の伝統打楽器を楽しむことができる生徒。

Ⅲ　めざす授業像

生徒一人一人が和太鼓の基礎的な「知識・技能」を身に付け、生き生きとリズム表現ができる授業。

Ⅳ　研究の目標

和太鼓の講話やリズム表現活動を通し、和太鼓の基礎的な「知識・技能」を身に付け、日本の伝統打楽器に興味関心を持ち、演奏を楽しむための学習指導の工夫を図る。

V　研究の仮説

1　基本仮説

和太鼓によるリズム表現の発表の場を設定し、生徒一人一人が協力し曲を完成させるような指導の工夫をすれば、和太鼓による合奏やアンサンブルができ、日本の伝統打楽器を楽しむ生徒が育つだろう。

2　作業仮説

(1)　和太鼓の練習の場において、和太鼓の知識や叩き方の動作を細かく分解して指導をすれば、和太鼓の基礎的な知識・技能が身に付くであろう。

(2)　和太鼓によるリズム表現の発表に向けて、グループで支援し合えるような手だてを工夫し指導をすれば、興味が高まり、自分たちで演奏を楽しむことができるであろう。

(3)　地域の人材を活用して、和太鼓に関する専門的な指導を受けることによって、和太鼓への関心、技能が高まり感動的な演奏ができるであろう。

VI　研究構想図

研究テーマ
日本の伝統打楽器を楽しむ指導の工夫
－　和太鼓によるリズム表現活動を通して－

目指す生徒像
和太鼓の基礎的な「知識・技能」を身に付け
日本伝統和楽器をを楽しむことができる生徒

目指す授業像
生徒一人一人が和太鼓の基礎的な「知識・技能」を身に付け、　生き生きとリズム表現ができる授業

研究目標
和太鼓の講話やリズム表現活動を通し、和太鼓の基礎的な「知識・技能」を身に付け、日本の伝統打楽器に興味関心を持ち楽しむための学習指導の工夫を図る。

基本仮説
和太鼓によるリズム表現の発表の場を設定し、生徒一人一人が協力し曲を完成させるような指導の工夫をすれば、和太鼓による合奏やアンサンブルができ、日本の伝統楽器を楽しむ生徒が育つだろう。

作業仮説１
和太鼓の練習の場において、和太鼓の知識や叩き方の動作を細かく分解して指導をすれば、和太鼓の基礎的な知識・技能が身に付くであろう。

作業仮説２
和太鼓によるリズム表現の発表に向けて、グループで支援し合えるようなてだてを工夫し指導をすれば、興味が高まり、自分たちで演奏を楽しむことができるであろう。

作業仮説３
地域の人材を活用して、和太鼓に関する専門的な指導を受けることによって、和太鼓への関心、技能が高まり感動的な演奏ができるであろう。

研究内容

1	学習指導要領の確認	4	和太鼓の授業展開例
2	和太鼓に関する研究	5	年間指導計画
3	和太鼓の実技研究	6	評価

Ⅶ　研究内容

1　新学習指導要領（音楽科器楽）の確認

(1)　教科の目標

表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、豊かな情操を養う。

(2)　器楽に関する目標

①　音楽活動の楽しさを体験することを通して、音や音楽への興味・関心を養い、高め、音楽によって生活を明るく豊かなものにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度を育てる。

②　音楽表現や楽曲構成の豊かさや美しさを感じ取り、基礎的な表現の技能を身につけ、伸ばし、創造的に表現する能力を育てる。

(3)　指導内容の配慮事項

器楽指導については、指導上の必要に応じて弦楽器、管楽器、打楽器、鍵盤楽器、電子楽器及び世界の諸民族の楽器を適宜用いること。また、和楽器については、３学年間を通じて１種類以上の楽器を用いること。

和楽器一式とは	箏、三味線、尺八、篠笛、和太鼓一式、木魚、当たり鉦一式を含む

2　和楽器を授業に取り入れる際の留意点

授業に取り入れる和楽器の選定は、各校の実情に応じたものでなければならない。次のことに留意し選定する。

(1)　楽器の演奏技法について

楽器を使って表現活動をするには、その楽器に関する理解や奏法を身に付けないと思いどおりの表現をすることはできない。しかし、楽器によってはかなりの時間を用しないと音一つ出せないものもある。「楽器」とはだれもが簡単に演奏できる程度の楽器ということである。また、「基礎的な奏法」とは、その楽器本来の音色で演奏できるようにするための正しい奏法の理解と、活動に用いる楽曲、あるいは自分のイメージを表現するのに最低限必要な奏法の習得ということである。したがって、必ずしも曲が演奏できるところまで到達させなさいではなく、触れたり体験するだけでもいいと言える。

(2)　生徒の興味関心の高い楽器を選定する。

生徒一人一人の個性や興味・関心を伸ばすためには、生徒や学校の実情に応じ、可能な限り多種類の楽器を活動に取り入れて体験をさせることが望ましい。本県において和楽器の授業で用いることが可能な楽器には、和太鼓やカンカラ三味線キット、四ツ竹等が考えられる。

3　和太鼓を使用する理由

和太鼓が音楽の授業にふさわしい楽器であるのは、次の４つの観点からである。

(1)　身近な存在である

和太鼓は、歌や三味線などの伴奏音楽として使われていたが、１９７０年代後半から太鼓がメインとなって演奏されるようになった。さらに、各自治体などが主催する祭等に、多くの中学生が参加し演奏を楽しんでおり、運動会や文化祭などの学校行事にも取り上げられ、身近にある楽器である。

(2)　楽器が揃えやすい

本県では和楽器といえば三味線がよく使われていたが、価格の関係でひとクラス分揃えるのは難い。しかし、「締め太鼓」や「大太鼓」は、各学校でエイサーが盛んに行われていることもあり、ある程度保有してる。また、他校や自治会、役所などからも借用することができ、比較的揃えやすい楽器であるといえる。

(3)　音楽的な観点から

和太鼓の醍醐味は、太鼓を打った時の手応えや響きの迫力、振動を体感することで深く味わえるものであり、一打一打に気持ちを込めて打ち込むことによって、感情表現も十分にできることである。また、和太鼓の「ドーン」という響きは何かに駆り立てられるような気持ちが高揚したり、心が落ちつく感じだったりとダイナミック幅が広く、自分が表現したいと思っている感情を素直に表すことができる。

和太鼓は短時間で習得するのが可能で、一単元に多くの時間を割くことができない音楽の授業の現状にあっている。また、和太鼓は太鼓譜を使って授業をすることによって、読譜力につなげられ、唱歌を使うことによってリズム感を養うことができる。和太鼓による授業形態として、一斉学習やグループによる学習も可能で、アンサンブルや合奏もできる。

(4)　技能の観点から

和太鼓を伸び伸びたたかせることにより気持ちの解放をはかることができる。「笛がうまく吹けない」「歌が上手に歌えない」等、授業にストレスを感じていた生徒のストレス解放にもなると思う。また、楽譜が読めなくても口唱歌による指導法があるので、譜読みが苦手な生徒でもあまり苦労しないで曲を覚えることができる。

4　和太鼓の指導方法

(1)　動作を細かく分解して指導する。

和太鼓の基本的な技能の指導として、バチの握り方、太鼓を前にしてのかまえ方、打ち方、鼓面とフチの打ち方、などをワークシートを参考にさせながら、一つ一つの動作について細かく、動作を示しながら指導する。唱歌については、ドン（右打ち）コン（左打ち）など唱歌の記号について理解させ、唱歌で書かれた太鼓譜を見て自主学習ができるようにする。

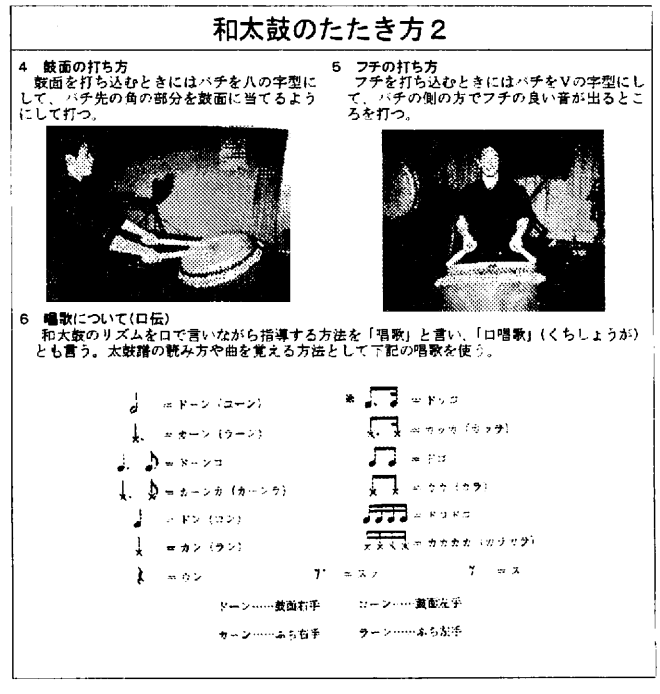


図１和太鼓のたたき方ワークシート

(2)　太鼓譜による指導

和太鼓練習曲を見ながら基本練習を行い、練習曲が進めばグレードも高くなり、より技能も高まる。

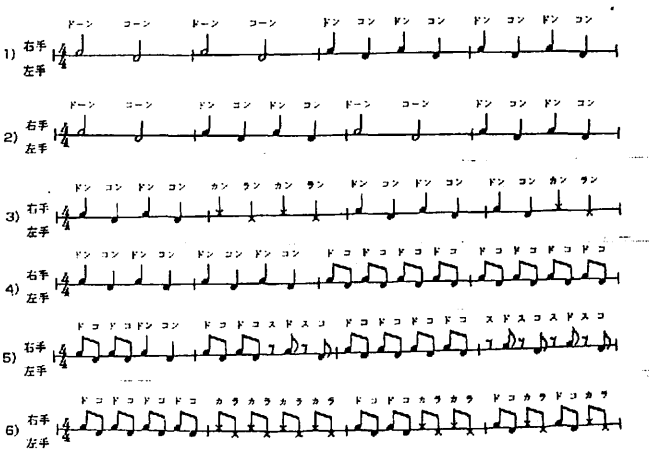


図２和太鼓練習曲

(3)　グループで協力し合い曲を完成させるよう支援する。

①　授業での発表は各グループごとに行い、各グループのアンサンブルを強化する事によって、全体合奏の精度を高める。

②　教師は、遅れている生徒の指導等、各グループの状況をしっかりと把握し、その状況に合った支援をする。また、各グループのリーダーへ練習の手順や方法を示し、グループで協力して遅れている生徒へ対応も行わせる。

(4)　地域人材の活用

①　地域人材の活用の理由

教育は学校だけで行えるものではなく、生徒は「地域の子である」、地域も子供を育るのでなければ真の意味での教育とは言えない。地域の人との交流を図ることは、生徒の学習意欲を起こさせ学習の連続性を持たせることができる。また、生徒一人一人の表現の幅を広げたり、創造的な学習活動を生み出したり、音楽表現の楽しさを味わわせるなどの学習効果が期待される。

②　地域人材の活用のしかた。

地域の人材は、題材に適した指導技術を持ち、生徒一人一人とコミュニケーションを図りながら指導をする事ができる人を選ぶ。実施にあたっては、教師が足を運んで綿密な事前打ち合わせを行う。またすべてを地域の人にお任せにするのではなく、指導目標やこれまでの指導過程などを細かく知らせ、単発的な授業ではなく継続性のある授業展開を行う。

Ⅷ　指導計画の作成

1　題材名「和太鼓のリズム表現」

2　題材目標

和太鼓のリズム表現活動を通し、和太鼓の基礎的な「知識・技能」を身に付けさせ、伝統打楽器への興味・関心を高め、リズムの課題学習を意欲的に取り組ませ、和太鼓によるアンサンブルや合奏を楽しく表現する態度を身に付ける。

3　題材について

(1)　題材設定の理由

新指導要領に示されている「楽器」とは、習得するまでに時間を要するものではなく、誰もが簡単に演奏できる程度で、音楽的な表現が可能なものを指す。それらの条件を満たす楽器として和太鼓は演奏が容易にでき、音楽的な表現も十分に行うことができる。

和太鼓のリズム課題学習に取り組むことにより和太鼓の技能を高め、教師の発する唱歌や範奏太

鼓、合奏をすることによりリズム感を身につけることができる。

本題材では、音楽を形づくるもととなるリズムを口唱歌で感覚的にとらえさせ、それを積み重ねると和太鼓の曲になり、和太鼓のリズム表現を体験させ、生徒一人一人の個性的な表現を導き出そうとするものである。さらに、和太鼓を叩くという表現活動を通して、我が国の伝統音楽に興味・関心を持たせることをねらいとする。

(2) 授業観

和太鼓に関する歴史的な流れや、日常の使われ方、和太鼓のいろいろな種類などの和太鼓に関する知識を身につけさせる。バチの持ち方や、左右打ちのことば、フチ打ちのことばなどを理解させ、太鼓譜を用意することによって自主学習へとつなげ、読譜力の向上をはかる。

和太鼓のリズム課題学習において課題を解決したときの成就感を味わうことによって、より意欲的に次の課題に取り組むことができ、和太鼓の技能を身に付けることができる。

和太鼓曲「どどんこどん」の二部合奏に取り組み、メロディーと二部パート両方とも練習をさせ、グループでアンサンブルを、全体で二部合奏をすることにより、音の重なりや他声部の音を聞くことによって和太鼓を楽しむことができる。

(3) 教材観

和太鼓曲「どどんこどん」は長胴太鼓のための二部合奏曲で、太鼓譜があり和太鼓未経験者の教師でも指導が可能である。この曲は初心者用の曲で、唱歌による言葉やリズムもはっきりしてるので、リズムのポイントを明確に示すことができる。また、シンコペーションとタッカタッカのリズムが多く、メリハリがあり、アクセントの位置をしっかりと示すことにより合奏やアンサンブルの精度やリズム感を高めることができる。また、フレーズとフレーズのつながりがや、リズムに前の小節に使用したものが出てくるので覚えやすい。メロディーのシンコペーションの後に二部のフチ打ち「カラカッカラ」が出てくるのであわせやすく、楽しく表現することができる。

(4) 生徒観

明るく元気があり男女の仲が良く、集会時の集合整列や給食の準備などが早いクラスである。音楽の学習に関しては、歌やピアノが好きで音楽の学習が好きな生徒が５％、どちらでもない生徒が８１％、おもしろくないから、歌が嫌いだから等の理由で音楽の学習が嫌いな生徒が１３％いる。

そこで、和太鼓の授業で、自分の感情を表現することにより興味・関心につなげる。

和太鼓による二部合奏をグループで練習することにより、自分の活動を振り返る場を設定する。

グループ員からの支援によって演奏技能を高め、より精度の高い合奏を行い楽しく表現できる生徒の育成を図る。

(5) 指導目標

① 和太鼓による表現のおもしろさを味わわせるとともに、音楽の要素であるリズムについて理解させる。

② 和太鼓を表現することによって我が国の伝統音楽への興味・関心を高め、和太鼓について理解させる。

4　単元指導計画

(1)　題材の観点別評価基準

【「A表現・器楽」の評価基準】　　国立教育政策研究所、音楽、評価の観点から抜粋

音楽への関心・意欲・態度	音楽的な感受や表現の工夫	表現の技能
・楽器の特徴や曲にふさわしい音色や奏法、声部の役割と全体の響きの調和に関心を持ち、器楽や合奏の表現をすることに意欲的である。	・音楽の構成要素・表現要素を知覚し、それらが生み出す曲想の美しさを感じ取っている。 ・楽器の特徴や曲にふさわしい音色や奏法、声部の役割を感じ取って表現を工夫している。	・楽器の特徴や曲にふさわしい音色や奏法を生かして器楽表現する技能を身に付けている。 ・声部の役割を生かし、全体の響きに調和させて合奏表現をする技能を身に付けている。

(2)　和太鼓の観点別評価基準

	ア　音楽への関心・意欲・態度	イ　音楽的な感受や表現の工夫	ウ　表現の技能
題材の評価基準	・和太鼓の特徴やいろんな種類の和太鼓を理解し、関心を持っている。 ・和太鼓の勇壮さ、楽器や奏法に関心を持ち和太鼓の表現や合奏に意欲的に取り組んでいる。	・和太鼓の奏法の特徴や表現の幅広さを理解している。 ・和太鼓の特徴を生かし、声部の役割と全体の響きの調和を感じ取って器楽や合奏の表現を工夫している。	・和太鼓の基本的な演奏方法を生かして、表現する技能を身につけている。 ・声部の役割を生かし、全体の響きに合わせて合奏表現をする技能を身に付けている
具体的な評価基準	1 日本や沖縄の伝統音楽に興味・関心を持っている。 2 和太鼓の音の特徴や奏法に関心を持ち、表現することに意欲的である。 3 和太鼓の合奏で他の声部の役割や表現意図に関心を持っている	1 和太鼓曲「どどんこどん」の軽快な旋律で（どどんこ）のシンコペーションを感じ取っている 2「どどんこどん」の旋律で（すっこどんこん）のすの休符を感じ取っている。 3.「どどんこどん」の伴奏でフチ打ちを旋律との調和を感じ取って合奏表現を工夫している。	1. 和太鼓の基本練習をすることで基礎的な演奏技能を身につけている。 2. 和太鼓の音の特徴や奏法を生かして表現する技能を身につけけている。 3. 他の声部の役割や表現意図を理解して合奏表現する技能を身に付けている。

(3)　観点別評価の進め方（評価基準）

学習活動における具体的な評価基準	A. 十分満足できる状況であると判断した具体的な例	B. おおむね満足できると判断した具体的な例	C. 努力を要すると判断した具体的な例
【ア音楽への関心意欲態度】 1 日本や沖縄の伝統音楽に興味関心を持っている。 2 和太鼓の音の特徴や奏法に関心を持ち表現に意欲的である。 3 和太鼓の合奏で他の声部の役割や表現意図に関心を持っている。	自己評価表に自分の考えを十分な量記入している。 自己評価表の十分意欲的に表現できた。 自己評価表の他のパートを理解して表現できた。	自己評価表に自分の考えを記入している。 自己評価表のおおむね意欲的に表現できた。 自己評価表の他のパートを理解して表現できた。	自己評価表に自分の考えを記入してない。 自己評価表の意欲的に表現できなかった。 自己評価表の他のパートを理解できなかった。
【イ音楽的な感受や表現の工夫】 1 和太鼓曲「どどんこどん」の軽快な旋律で（どどんこ）のシンコペーションを感じ取っている。 2「どどんこどん」の旋律で（すっこどんこん）のすの休符を感じ取っている。	自己評価表のシンコペーションのリズムを十分に感じ取れた。 自己評価表の（すっこどんこん）の休符を十分に感じ取れた。	自己評価表のシンコペーションのリズムを感じ取れた。 自己評価表の（すっこどんこん）の休符を感じ取れた。 自己評価表のフチ打ちで旋	自己評価表のシンコペーションのリズムを感じ取れなかった。 自己評価表の（すっこどんこん）の休符を感じ取れなかった。

3「どどんこどん」の伴奏でフチ打ちを旋律との調和を感じ取って合奏表現を工夫している。	自己評価表のフチ打で旋律を聞きながら十分にたたけた。	律を聞きながらたたけた。	自己評価表のフチ打ちで旋律を聞きながらたたくことができなかった。
【ウ　表現の技能】 1和太鼓の基本練習をすることで基礎的な演奏技能を身に付けている。 2和太鼓の音の特徴や奏法を生かして表現する技能を身に付けている。 3他の声部の役割や表現意図を理解して合奏表現する技能を身に付けている。	自己評価表の基本練習を全部たたくことができた。 自己評価表の口唱歌に合わすことが十分にできた。 自己評価表の他のパートを聞きながら十分にたたくことができた。	自己評価表の基本練習をある程度たたくことができた。 自己評価表の口唱歌に合わすことができた。 自己評価表の他のパートを聞きながら たたくことができた。	自己評価表の基本練習をたたくことができなかった。 自己評価表の口唱歌に合わすことができなかった。 自己評価表の他のパートを聞きながらたたくことができなかった。

(4)　指導と評価の計画（5時間）

時	○学習のねらい・学習内容	指導上の留意点	評価方法など
1	○日本の伝統打楽器について、関心を持たせ和太鼓をたたきたいという態度を育てる。 ・伝統打楽器の過去、現在の使われ方を理解する。 ・「皮で出来た打楽器」について理解する。 ・唱歌について理解する。 ○バチの握り方を理解する。 ・基本練習１～３までを唱歌でおぼえて練習する。 ・「どどんこどん」の主旋律を前半だけ練習する。	・日本の伝統打楽器について理解しようとする心情を高めさせる。 ・これまでの伝統打楽器の用途について知ることによって、関心を引き出させる。 ・「皮でできた打楽器」には２種類あることを説明する。 ・太鼓譜を見せながら、動作も交えて説明をする。 ・バチの握り方はとばさない、安全面に配慮した説明をする。 ・基礎的な技能につなげていく指導をする。 ・唱歌で声を出して曲を覚えさせることによって、表現する意欲につなげていく。	自己評価表（アー１） ・日本や沖縄の伝統音楽に興味関心を持っているかを記述させ、記述内容を評価する。 ・講話で説明 ・資料の１を使用 ・太鼓譜を使用 自己評価表（イー１） ・「どどんこどん」の軽快な旋律で（どどんこ）のシンコペーションを、感じ取っているかを記述させ、記述内容を評価する。
2	○和太鼓の音の特性を理解し、表現の技能を身に付ける。 ・「金属や土でできた打楽器」について理解する。 ・ストレッチ運動をする。 ・基本練習１～６の練習をする。 ○和太鼓のかまえ方を理解し、表現の技能を高める。 ・「どどんこどん」の旋律を全部たたけるようにする。 ・グループで練習する。 ・グループごとに発表する。 ・「どどんこどん」の主旋律だけの	・和太鼓の音の特性を理解させることによって、興味を持たせ、技能へとつなげていく。 ・手首や筋を痛めないようにするなど、必要性を強調する。 ・４～６を重点的に唱歌でおぼえさせ、技能を身に付けさせる。 ・和太鼓のかまえ方を理解させることによって、大きく伸び伸びとした動作で表現させる。 ・へその高さが太鼓の中心より下に来る位置にかまえる。 ・効率的なグループ練習の方法を指示する。 ・太鼓譜を見ながらの演奏で、太鼓	自己評価表（アー２） ・和太鼓の音の特徴や奏法に関心を持ち、表現に意欲的であるかを記述させ、記述内容を評価する。 ・資料２を使用 ・太鼓譜を使用 ・動作で指示 自己評価表（イー２） ・「どどんこどん」の旋律で（すっこどんこん）のすの休符を感じ取っている。 ・バチ以外の金属音がする物でテンポ指示

	全体合奏をする。	譜を最後までおえるようにする。	
3	○和太鼓曲や練習曲を習得することによって技能を高める。 ・「木や竹でできた打楽器」について理解する。 ・ストレッチ運動をする。 ・基本練習１～８の練習をする。 ○和太鼓の打ち方について理解し、和太鼓が持つ躍動感を感得する。 ・「どどんこどん」の主旋律の練習をする。 ・グループ練習をする。 ・「どどんこどん」の伴奏の練習を半分までする。 ・グループで練習をする。 ・グループで発表する。 ・二部合奏をする。	・利き腕でない方を強化するようにして、左右のバランスを図るようにする。 ・７，８をとくに練習させ、個人練習のやり方も指示する。 ・打ち方に関しては腕全体を使い、手首のスナップをきかせ瞬発力で打つ。腰に重心を置く。 ・シンコペーションのリズムと「すっこどんこん」の休符を感じながら表現させる。 ・「からかっから」の入るタイミングをしっかりと示してあげる。 ・和太鼓による二部合奏の雰囲気を味わわせる。	自己評価表（ウー１） ・和太鼓の基本練習をすることで、基礎的な演奏技術を身に付けているかを記述させ、記述内容を評価する。 ・資料３を使用 ・動作で指示 ・太鼓譜使用 自己評価表（アー３） ・和太鼓の合奏で他の声部の役割や表現意図に関心を持っているかを記述させ、記述内容を評価する。

第４時の展開

平成 14 年 6 月 20 日（木）５校時
浦添市立神森中学校２年３組
男子 21 人　女子 18 人　計 39 人
授　業　者　　大　田　朝　健

1　題材名「和太鼓の合奏表現」

2　題材設定理由

前時までで日本伝統打楽器についてある程度の理解をさせる指導を行い、和太鼓に関する興味や関心を高めることによって、和太鼓の表現への意欲につなげ、基礎練習曲や和太鼓曲を練習する事によって、和太鼓の技能を高める手立てを行ってきた。さらに、グループで支援をし合いアンサンブルの精度を高める事によって、合奏のレベルを引き上げ完成度の高い合奏をすることによって、満足感や達成感などが得られ、より和太鼓を楽しむことをねらいとして設定した。

3　本時の目標

①　一人一人の生徒に和太鼓の表現活動を意欲的に取り組ませる。

②　一斉活動やグループ活動を充実させる。

③　和太鼓による合奏のおもしろさを味わう。

4　学習展開

	学習内容・活動	指導上の留意点	評価方法
導入 5 分	○本時の学習目標を理解する。 ・ストレッチ運動をする。	・前時までの流れをおさえながら本時の目標を理解させ、そのための手だても理解させる。 ・手首などの筋を痛めないようにさせる。	・目標の掲示 ・太鼓譜を使用
	・基本練習１～８まで、唱	・和太鼓練習曲を演奏しながら、	

展開 40	歌を入れて練習する。 ・基本練習を習得することによって和太鼓の技能を身に付けるようにする。 ・個人練習をする ・「どどんこどん」（旋律）の練習をする。唱歌から練習をする。 ・グループで練習をする。 〇鼓面の打ち方・フチの打ち方について理解する。 ・和太鼓の勇壮で躍動感がある、音に近づけるようにする。 ・「どどんこどん」（伴奏）の前半の練習をする。唱歌から練習をする。 ・グループで練習をする。 ・「どどんこどん」（伴奏）の後半の練習をする。 唱歌から練習をする。 ・グループで練習をする。 ・グループで発表をする。 ・「どどんこどん」の二部合奏をする。 ・「どどんこどん」のアンサンブルをグループで 練習する。 ・グループごとにアンサンブルの発表をする。 ・各グループの演奏を鑑賞しよさや、改善点を指摘できるようにする。 ・「どどんこどん」の二部合奏をし、演奏を楽しめるようにする。 ・二部合奏までやれたという成就感を感じるようにする。	周囲とも合わせるように促す。 ・できない所を繰り返し練習し、隣の人の支援もし合 うなどの指示をする。 ・唱歌で声を出すことによって、ただすく覚えたり、表現の意欲へとつなげる。 ・バチを打ったあとの形は、鼓面を打つときにはVの 字形で、フチを打つときには八の字形になるように打つ。 ・フチ打ちのタイミングとポイントをしっかりと理解させ、鼓面うちとフチ打ちの切り返しがしっかりできるようにする。 ・伴奏を最後までたたけるようにさせる。 ・各グループの練習状況を把握し、それぞれの状況 に応じたアドバイスを行う。 ・基本練習での技能を生かし、各グループとも協力してアンサンブルの精度を上げるように支援をする。 ・他のグループのアンサンブルのよさを感じ取り、自分たちの演奏に生かせる態度を養う。 ・合奏曲で体全体を使って、表現することで、より楽しく表現活動ができるようにさせる。 ・素直に授業態度などが記述できるように配慮する。	・太鼓譜を使用 自己評価表（ウー１） ・和太鼓の基本練習をすることで基礎的な演奏技能を身に付けているかを記述させ、記述内容で評価する。 ・立奏で行う 自己評価表　（ウー２） ・和太鼓の音の特徴や奏法を生かして表現する技能を身に付けているかを記述させ、記述内容で評価する。 ・立奏と向き合っての活動 自己評価表（ウー３） ・他の声部の役割や表現意図を理解して合奏表現する技能を身に付けているかを記述させ、記述内容で評価する。
まとめ 5	・自己評価への記入をする。 ・次へのステップとして、今回学習した和太鼓をそのままで終わらせるのではなく、学校の何かの行事で発表できるようにする。	・次回に向けての希望を持たせる内容の講話をする。	・自己評価表

5　授業風景

写真１　グループでの練習

写真２　お互いに支援し合っている場面

6　生徒の感想

Aさん：とても緊張した。
Bさん：「どどんこどん」をメロディーと伴奏の両方をたたけた。
Cさん：最後はきれいに太鼓の音が出てうれしかった。
Dさん：メロディーと伴奏をうまく合わすことができて楽しかった。
Eさん：グループでもしっかりできて雰囲気が良かったと思う。

Fさん：太鼓を使ってリズムを合わせたりして楽しかった。
G君：強くたたいたり、弱くたたいたりすることで音の大きさが違う。
H君：真ん中と外では音が違う。
I君：太鼓をたたくのは少し難しかった。
J君：まちがったところがほとんど無くて良かった。
L君：「どどんこどん」を全部できたのでうれしい。

第５次の展開

平成14年７月１５日（火）５校時
浦添市立神森中学校２年３組
男子21人　女子18人　計39人
授業者　　銘刈良二
アシスタント　嘉数綾乃　大田朝健

1　題材名　「地域の人材を活用した和太鼓の指導」

2　題材設定理由

新指導要領がスタートして総合的な学習が位置付けられ、学校だけでは教育活動が難しくなってきた。また、体験的な学習は、学校だけで実施しても成果は十分に期待できない場合がある。そこで、地域の人材の登用が行われるようになった。さらに、専門的な指導技術がある地域の人材を生かして、より質の高い授業を目指すために十分なる成果も期待することができる。

より多くの人たちとの関わりから自分をよりよく表現できる方法を見つけ出すことができるようにするとともに、音楽活動を通して周りの人たちとコミュニケーションを取ることができることも大事である。

生徒の身近にある最も関心が高い地域行事として、各自治体が主催する祭りがあげられる。そうして、多くの生徒が祭りやそこで行われているイベントを楽しんでいる。県内の祭りでよく耳にするの

がエイサーをはじめとする和太鼓の音である。祭りで繰り広げられる和太鼓の音は人の感情に直接訴えかける力がとくに強く、魅力を感じる生徒も多いと思われる。

和太鼓のよさは、実際に和太鼓を打ちその手応えや「ドーン」という響きの迫力、振動を体感することで深く味わえるものである。

和太鼓の力強い響きや勇壮なエイサーなどの伝統芸能は全国各地に伝えられていて、それぞれに由来があり、魅力にあふれ日本の伝統文化として、生徒に知識を身に付けさせたり、太鼓を経験させたいものである。

教材化にあたっては、まず我々教師が日本の伝統音楽に対し教育的価値を認め、指導者としての研鑽を積む必要性を強く感じる。また、和楽器の導入に関して、各学校において和楽器の不足や、教師の指導力の問題があげられる。これらの要因を地域の和太鼓集団の楽器を借用し、和太鼓集団の指導者に指導を仰ぐことにとって、克服するというのが本テーマの理由である。

地域の人材を活用することによって「開かれた学校」の実現も図れる。また、より専門性の高い授業の場を設定することによって、生徒一人一人は和太鼓に対する知識や技能をより多く身に付け、和太鼓の本物の響きを多く体感するこも期待したい。

3　教材について

この曲は長崎県小浜町にある和太鼓の集団、西方小天鼓（サイホウコテング）の宮原さんが作曲した創作太鼓曲である。「人生を楽しく歩んでいきましょう」という意味で、太鼓に振りがついている。しかし、本授業では和太鼓の音だけで、振りは時間の都合で取り入れない。曲の調子は明るい曲調で、テンポは普通の速さである。したがって、太鼓の経験があまりない人でも馴染みやすい曲だと思われる。曲の構成としては同じリズムパターンの繰り返しで覚えやすく、短時間でマスターをすることができる。また、曲の基礎的リズムがタッカタッカ（ドッコドッコ）でできていて、沖縄の民謡とにている。九州の和太鼓曲ではあるが沖縄的な要素を持った曲である。

本授業での使用楽器は、桶太鼓１、締太鼓、大太鼓５、チャッパ、四ツ竹、パーランクー、ドラの７種類の楽器を使用する。

4　スタッフについて

講師は銘苅良二さん、アシスタントは嘉数さん、サブに本校教諭大田朝健の３人。

講師の銘苅さんは浦添市役所の青少年育成課に勤務し、浦添市内にある太鼓集団、鼓衆（ちじんしゅう）若太陽（わかてぃーだ）の統括リーダーでもある。銘苅さんは多忙な仕事の合間を縫って、太鼓の指導を市内外の小学生から大人まで幅広く行っている。また、技術指導だけにとどまらず、指導する中で太鼓の厳しい練習にも耐えて不登校の子が更正をして学校に通うようになった等、青少年の健全育成にも大きく貢献している。銘苅さんがリーダーを務める鼓衆（若太陽）は、１９９３年に結成され、創立９年目である。鼓衆（ちじんしゅう）とは沖縄の言葉で「太鼓を打ち鳴らす人々」を意味する。若太陽（わかてぃーだ）とは、てだこの町浦添市での活動を意味する。また、この団体の活動はは、県内の祭りやイベントへの参加を始め、県外、国外にまで及びいろんな地域で演奏活動を行い高い評価を得てきている。鼓衆の演奏のスタイルは沖縄のリズムをベースに、和太鼓に沖縄の楽器を取り入れた固定式の太鼓である。しかし、イベントに応じてはエイサー太鼓も演奏をする。

5　学級観について

神森中学校２年３組の生徒は明るく、男女の仲がとてもよく授業での反応もとてもいいクラスである。和太鼓の授業を４時間経験し、全員締太鼓を使っての授業で、基礎的なリズムと簡単な太鼓曲を６６～６９パーセントの生徒がたたけるようになった。また、６６％の生徒が太鼓のリズム表現を楽

しめたということである。しかし、太鼓の本物の音を体感することができなかった。また、太鼓表現は楽しめたが感情表現をするところまではもっていくとができなかった。そこで、専門的な技術指導ができる銘苅さんに前回できなかったところを指導していただきたい。楽器についても写真でしか見たことがない物も今回見ることができるので、和太鼓の知識を広げることも期待したい。

6　目標

①　これまでの授業で身につけた太鼓の知識や技能をさらに伸ばすようにする。

②　地域の人とふれあうことによって人との関わり方を学び、自分をよりよく表現できるようにする。

③　和太鼓の響きを体感し、和太鼓曲を仕上げる充実感を得、和太鼓の感情表現を楽しめるようにする。

※授業に入る前に楽器の配置や講師の紹介は終わっておく

7　本時の展開

	学習内容・活動	指導上の留意点	評価方法など
導入5分	・G先生のあいさつ ・模範演奏を聞く。 ・G先生「イーヤサッサ」応答生徒「ハーイヤ」 ○学習のめあてを確認する。「走楽」を1時間で仕上げる。	・楽器配置や座席配置完了。 ・G先生＋アシスタント演奏 ・かけ声をかけ合うことによって授業のふん囲気作りをさせる。 ・めあての確認までの動きをスムーズに行なわせる。	・ゲストティチャー紹介は教師が行う。 自己評価表（アー1） ・日本や沖縄の伝統音楽に興味関心を持っているかを記述させ、評価する。
展開40分	・鈴、チャッパ、ドラ、指　笛、四つ竹など、いろんな和打楽器にふれる。 ・グループを一つのブロックにして①手で、②足踏みをしながら、③「ハッ」と声を出しながらリズムうちをする。 ○締太鼓＋おけ太鼓、宮太鼓、すず、チャッパに楽器の割り当てテストをする。 ・4つ竹グループの指導。 ・締太鼓＋桶太鼓の指導。 ・宮太鼓の指導。 ・チャッパ、すずの指導。 ・全体合奏（ビデオ撮影）	・紙の上でしか見たことのない楽器にふれさせることによって、和打楽器について理解を深めさせる。 ・表4回、裏4回をくり返すことによって、リズム感を養わせる。 ・曲でのかけ声がスムーズに出るようにさせる。 ・締太鼓であたえられたリズムをたたかせることによって個々のリズム感を知る。 ・締太鼓、4つ竹、パーランクのグループはB教室で、アシスタントと教師で指導し効率のいい練習をさせる。	・G先生が実際に音を出す。 自己評価（ウー2） ・和太鼓の音の特徴や奏法を生かして表現する技能を身につけているかを記入させ評価する。 ・A教室は締太鼓＋桶太鼓、宮太鼓、鈴、チャッパをG先生。 ・B教室はパーランクー、締太鼓、4つ竹　をアシスタントと教　師が指導をする。
まとめ5分	・ビデオ鑑賞（自分たちの映像）をする。 ・全体合奏 ・まとめ ・自己評価	・音と動きや全体合奏で楽しく演奏できたかなどをよく鑑賞させる。 ・成果をすべて出させる。 ・つぎへの課題を持たせる。 ・自己評価表を記入させる。	自己評価（ウー3） ・他の声部の役割や表現意図を理解して合奏表現する技能を身につけているかを記述させ評価する。

8　授業風景

写真３　おけ胴・締太鼓の指導

写真４　締太鼓の演奏風景

9　生徒の感想

Aさん：太鼓の種類によって音の大きさや響きが違うことがわかった。
Bさん：今日は踊りもやって楽しかった。
C君：個人指導ができていた。
D君：いつもは簡単な課題にいどんでいたけど、今日はあえてむつかしい課題でやって実感 がすごくあった。
E君：とてもわかりやすくとても楽しかった。
F君：いろいろな太鼓を感じた。

Ⅸ　研究の考察

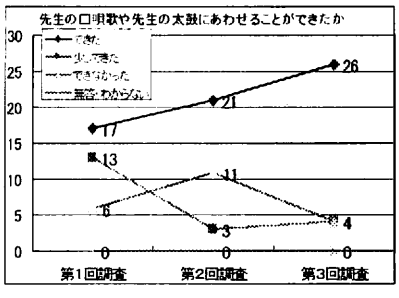
1　作業仮説の考察

(1)　作業仮説１

作業仮説１　和太鼓の練習の場において、和太鼓の特性やたたき方の動作を細かく分解して指導をすれば、和太鼓の基礎的な知識・技能が身に付くであろう。

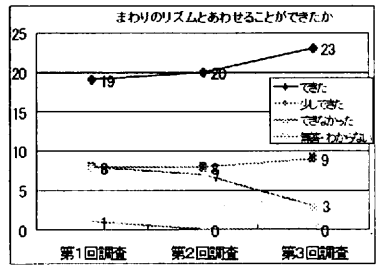
①　生徒へのアンケート調査結果

グラフ１　先生の口唱歌や範奏太鼓にあわせられたか



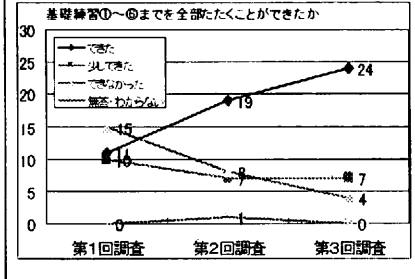
グラフ１から、先生の唱歌や範奏太鼓に合わせられる生徒が、９人増え合わせられない生徒が２人減っている。このことから唱歌などに反応し、バチをスムーズにコントロールできる生徒が増えている。

グラフ２　まわりのリズムとあわせられたか



グラフ2から、まわりのリズムと合わせられる生徒が４人増え67%、合わせられない生徒が５人減っている。このことからまわりへの配慮もしながら合奏をすることができる生徒が増えてきている。

グラフ３　基礎練習①～⑥まで全部をたたけたか



グラフ３から、基礎練習を全部たたけた生徒が１４人増え71%、できなかった生徒が１１人減っている。このことから時間を重ねることによって、和太鼓の基礎的な技能が身に付いてきているかが分かる。

（考察）

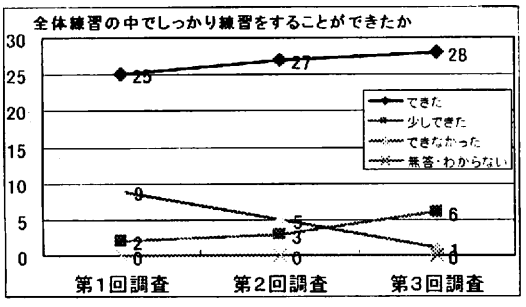
「どうすれば練習曲をたたけるか？」「まわりと合わせられるようにするには？」等、生徒が疑問を持ち創意工夫することによって課題の多くが解決された。和太鼓の特性について、自己評価表への記述が多くかかれており、おおむね理解できたと言える。

和太鼓の授業を重ねる中で、練習曲などを練習したり、合奏曲を合わせようとする態度が育ち、和太鼓の基礎的な技能を身に付けることができた。

(2)　作業仮説２

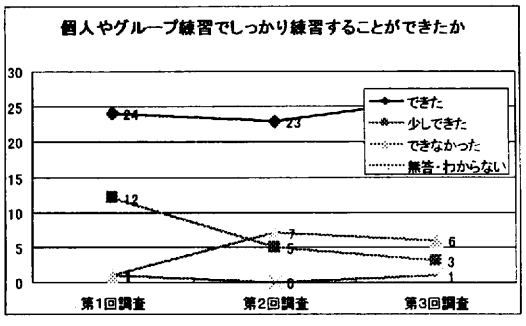
作業仮説２　和太鼓によるリズム表現の発表に向けて、グループで支援し合えるような手だてをえば、興味が高まり、自分たちで演奏を楽しむことができるであろう。

グラフ４　全体練習の中でしっかりと練習をすることができたか



（結果）授業を重ねるうちに、全体練習をしっかり取り組む生徒が増え 82 %、あまり取り組まなかった生徒が３%と減ってきてる。一斉指導の中で授業のシステムが分かってきたことや、目標を達成しようとする意欲が、ことが一斉指導での意欲を高めている。

グラフ５　個人やグループ練習でしっかり練習することができたか



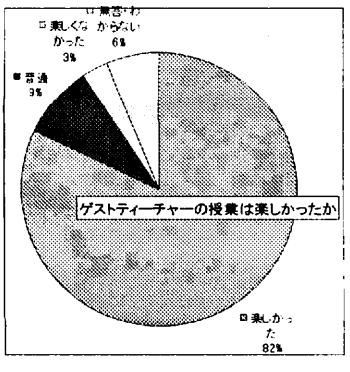
（結果）個人やグループ練習をしっかりと行える生徒が少し増え 78 %、できなかった生徒が 18 %と減っている。グループ活動の仕方の支援やできない生徒への個人指導を重ねた結果、グループ活動が活発に行えるようになった。

（考察）グループでアンサンブル練習ができるようになり、生徒同士お互いに支援し合う場面も見られ、各グループの発表に向けて、グループで曲を仕上げようとする意欲が見られた。

(3)　作業仮説３

作業仮説３　地域の人材を活用して、和太鼓に関する専門的な指導を受けることによって、和太鼓への関心、技能が高まり感動的な演奏ができるであろう。

グラフ６　ゲストティーチャーの授業は楽しかったか



（結果）授業後の生徒の感想の中に「和太鼓はいろんな音が出せるんだとということが分かった」、「とてもわかりやすくてたのしかった」等、普段の授業とは異なりとても楽しかったという声が多かった。

（考察）地域の人材を活用することにより、専門的な立場からの指導が受けられ、いろんな種類の伝統打楽器にも触れることができ、本物の和太鼓の音を体感することができた。ゲストティチャーの魅力ある人柄と指導力によって、和太鼓に関する関心が高まり感動的な演奏ができた。

X研究の成果と課題

1　成果

①　和太鼓曲や基礎的な技能が身に付き和太鼓の特性を理解した。

②　和太鼓による合奏やアンサンブルを楽しく行うことができた。

③　地域の人材を活用し、感動的な和太鼓の合奏をすることができた。

④　和太鼓を導入した年間学習指導計画を作成した。

⑤　和太鼓の評価規準を作成した。

2　今後の課題

① 和太鼓をわかりやすく理解できるようにする資料やワークシートなどの作成。

② 和太鼓曲の教材化。

③ 和太鼓の技能に関する指導書の作成。

④ 教師の和太鼓技術の向上。

【おわりに】

本研究は、新学習指導要領改訂で音楽科内容に加わった「和楽器」の導入実施にむけて、和太鼓の知識・技能に関する学習内容の研究、技能研究、和太鼓を導入した年間学習指導計画の作成、評価基準の作成を行ってきました。初めて試みる和太鼓の学習の研究は、何をどのように教えていったらいいかなど不安で一杯でした。

大城所長に鼓衆の銘苅さんを紹介してもらい、取材及び練習風景の見学で何日か通ううちに、自分も和太鼓の響きに魅せられていつの間にか一緒に練習をさせてもらっていました。また、和楽器の中で授業で扱う教材として和太鼓の良さに確信が持てるようになりました。これからも授業実践の中で生徒が生き生きと表現ができるように、自分の課題を意欲的に追求し、努力していきたいと思います。

研究期間中忙しい中ご指導ご助言をいただきました 、県立総合教育センターの玉城哲也指導主事、琉球大学の津田正之助教授にはご助言いただき有り難うございました。また、和太鼓の魅力を教えていただいた銘苅さん、鼓衆の団員の皆様にも感謝申し上げます。

当研究所の大城淳男所長はじめ、研究所職員の皆様に深く感謝申しあげます。さらに、研究の機会を与えてくださった浦添市教育委員会、大盛教育長はじめ指導主事の先生方、神森中学校の与那覇武校長はじめ諸先生方に心から感謝します。

※主な参考・引用文献

・『中学校学習指導要領の展開ー音楽科編ー』　中学校音楽科教育実践研究会編集　明治図書
・『音楽科重要用語３００の基礎知識』　吉富功修編集　明治図書
・『和楽器にチャレンジ．１和太鼓を打ってみよう』　現代邦楽研究所編集　夕分社
・『優しく学べる和太鼓教本』　河乃裕季　著者　夕分社
・『中学校学習指導要領、解説、音楽編』　文部省　教育芸術者
・『日本音楽による指導体系』　花井清　著者　全音楽譜出版社
・『日本音楽の授業』　山内雅子　著者　音楽之友社
・『これからの中学校音楽ここがポイント』　大槻秀一　他　編集　音楽之友社
・『やさしく学べる和太鼓入門』　田村拓男　全音楽譜出版社
・『はじめての太鼓』　横山政司　著者　音楽の友社
・『和太鼓入門ー響けまむれ太鼓ー』　島田明子　著者　音楽之友社